

氏名	牛路遥 (にゅう るやお)
学位の種類	博士 (文学)
報告番号	甲第604号
学位授与年月日	2023年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	井上ひさしの笑い——〈言葉〉と〈人〉をめぐって——
審査委員	(主査) 石川 巧 (立教大学大学院文学研究科教授) 金子明雄 (立教大学大学院文学研究科教授) 小森陽一 (東京大学名誉教授)

## I. 論文の内容の要旨

### (1) 論文の構成

序	井上ひさしの文学を解く鍵
第一部	反抗の武器としての言葉
第一章	〈枠組み〉の崩壊——井上ひさしコントの世界
第二章	「成る」可能性のない国家——「吉里吉里人」論
第三章	「共通語」の模索——「國語元年」論
第四章	言葉で〈加工〉すること——「父と暮せば」論
第二部	世界をつなげる評伝劇
第五章	「江戸は反吐」の構図——「小林一茶」論
第六章	時空間の狭間で——「頭痛肩こり樋口一葉」論
第七章	境界線としての「からだ」——「シャンハイムーン」論
第八章	喜劇への眼差し——「ロマンス」論
結語にかえて	
参考文献	
初出一覧	

### (2) 論文の内容要旨

井上ひさしの文学活動を俯瞰すると、戯曲の執筆に中心を置きつつ、それと並行するように小説を書いていたことがわかる。エッセイ、コント、批評なども縦横無尽に執筆しているが、その軸足は常に戯曲と小説の双方に跨っており、それぞれのジャンルで新しい表現を模索し続けている。

井上ひさしの文学の最大の特徴は、ストーリーやプロットに喜劇的な要素をふんだんに盛り込みつつ、背後に国家、法、歴史、戦争といった問題系が横たわっており、そうした大きな物語に呑み込まれまいとする人々が笑いの力を借りて権力や権威に抵抗する姿が描かれていることである。さらに、彼の文学には明確な読者や観客が想定されており、読者や観客を魅了するための様々な仕掛け、道具立て、物語の重層化といった技法が駆使されている。なかでも、井上ひさしが特に拘泥したのは対話的な〈言葉〉の掛け合いがもたらすディスコミュニケーションの表現である。井上ひさしの文学における〈笑い〉の趣向は、基本的に〈国家〉の権力や抑圧が支配する世界にあって、むしろ、〈言葉〉が通じ合わないこと、意味が誤読されていくこと、お互いの認識が衝突することに価値を置くところからはじまっている。それはまさに同一化を強いる暴力への抵抗として機能しているのである。

また、井上ひさしの文学には〈言葉〉と〈人〉という二つの主題が横たわっている。た

たとえば、彼の戯曲には古今東西の偉人や作家を描いた評伝劇が数多くある。『吉里吉里人』をはじめとした小説のモチーフには、しばしば〈国家〉と〈言葉〉の闘争が描かれている。逆にいえば、井上ひさしは笑いという縦軸に〈言葉〉や〈人〉という横軸を編み込むことで物語を構成しようとしたともいえる。

本論は、こうした認識枠組のもとで、井上ひさしの文学の普遍性に迫っている。読者や観客を笑わせるための趣向には特徴的なパターンや道具立てがあるため、初期のコント集を通じてその表現方法を分析することから考察をはじめ、第一部では反抗の武器としての〈言葉〉について、第二部では世界をつなげる評伝劇についての分析を試みている。以下、各章の概要を簡潔に説明する。

第一部では、コント、小説、戯曲など異なるジャンルの作品を取り上げ、それぞれの作品における〈言葉〉の闘争を論じている。第一章は、NHKの人形劇「ひょっこりひょうたん島」の台本執筆で人気を博した井上ひさしが座付作家となり、日本のコメディに新風をもたらしたてんぷくトリオのコントを扱った。てんぷくトリオのコントは、文字通り、三人であるからこそ成り立つ笑いの構造をもっている。漫才のボケとツッコミに相当する掛け合いに〈第三の視点〉＝観客の視点が組み込まれることで事態が相対化されるのである。また、井上ひさしのコントでは同音異義語のギャクや造語などによる言語遊戯が駆使されており、コミュニケーション・ツールとしての〈言葉〉そのものを脱構築する趣向がある。彼は笑いを通して常識を解体し、〈言葉〉の機能を再考させるのである。

第二章では、長編小説『吉里吉里人』を論じた。吉里吉里国は、表面上、ユートピアとして構想されているように見えるが、吉里吉里国の生成から消滅までのプロセスには〈国家〉とは何か？ 〈国家〉を〈国家〉たらしめるためには何が必要か？ といった問いが失敗の歴史として描かれている。だが、『吉里吉里人』には「このたびの一揆には「成る」可能性が十分にあったと思う」と語る「記録係」が登場する。分離独立運動が失敗するたびに増殖する「地の霊」がいる。そして、硬直した革命運動を笑いの力で推進しようとする語り手がいる。こうした超越的視点を導入することによって、井上ひさしは、失敗や敗北のなかから新しい力が萌芽するような世界を描いてみせたのである。

第三章では戯曲「國語元年」を取り上げた。第二章の『吉里吉里人』が日本からの分離独立を画策する「吉里吉里人」たちの物語であったのに対して、本作は、明治維新後の日本においてひとつの〈国家〉なるものを建設するために奔走する人々の物語であった。本作以前に、井上ひさしが〈言葉〉の闘争そのものを描いた戯曲には「花子さん」と「國語事件殺人辞典」があったが、彼はそれらを「失敗作」とよび、「國語元年」で捲土重来を果たそうとしたのである。作品では、全国各地から東京に集った人々が「共通語」＝人々が平等かつ自由にコミュニケーションできるような「ひとつ」の空間をつくりあげるために奮闘するわけだが、その過程において前景化されるのは、むしろ、それぞれの地域の歴史と文化と深く結びついた「方言」の面白さである。登場人物たちは多くの場面でディスコミュニケーションに陥り、トラブルに巻き込まれていくわけだが、井上ひさしはそれを〈笑い〉

に変換することでバラバラであることの面白さ、豊かさを表現したのである。

第四章では、戯曲「父と暮せば」を取りあげている。この作品も、表面上は原爆の体験と記憶を伝えること／継承することがモチーフになっているように見える。だが、作品の台詞、ト書き、演出をよく読んでみると、そこには作ること、訂正すること、修理すること、断ち切ることなど、いま目の前にあるものを加工することの大切さが繰り返し描かれていることがわかる。また、「父と暮らせば」では、体験や記憶を次の世代に伝えていくためには〈言葉〉による豊かな表現が必要であり、〈言葉〉の力こそが人を動かすという信念がある。原爆という悲劇を悲劇として語るだけではなく、笑いと涙が交錯する〈言葉〉で観客の心を動かさなければならないという認識が徹底している。

第二部では、数多い井上ひさしの戯曲において、とりわけ異彩を放っている作家評伝劇シリーズを論じた。作家評伝劇の場合は、観客や読者の側にそれぞれの文学者に関する予備知識がある。彼らの手による作品世界も人口に膾炙している。したがって、作家評伝劇は、目の前で演じられる舞台の背後にそれぞれの作家と作品世界が重ね合わされることになる。観客はそうした重層的な世界に身を沈めることで文学／演劇それぞれのカタルシスを得ることができるのである。こうした構造をより効果的に表現するために、井上ひさしは、劇中劇や劇中歌などの趣向を積極的に用い、作家の実人生と作品世界が渾然と絡み合うような作品を書き継いだのである。

第五章では作家評伝劇シリーズの第一作として位置付けられる「小林一茶」を取りあげた。この作品では、俳諧の〈言葉〉をめぐる本質的な議論、俳壇の構造、中央と地方の対立といった問題が扱われており、特に句作りの場面では俳人たちの対話を通してユーモア溢れる議論が展開されている。また、主人公の小林一茶は舞台上に登場せず、周囲の人間が彼の文学や人間性を語るかたちでストーリーが展開する。この作品は、のちに「俳諧師五部作」へとつながることになるが、井上ひさしはその第一弾の主人公に松尾芭蕉ではなく小林一茶を選び、定められた「式目」を壊し、「江戸は反吐」という棄て台詞を残して江戸＝中央から姿を消すヒーローを描いたのである。

第六章では、こまつ座旗揚げのために執筆された「頭痛肩こり樋口一葉」を取りあげている。この作品は悲劇的な生涯を送った一葉の評伝劇でありながら、けっして彼女の涙や悲哀で包み込もうとせず、むしろ、あつけらかんとした〈笑い〉とユーモアで覆い尽くすような表現が試みられている。近代が置き去りにする前近代、男尊女卑の社会から排除される女たち、そして、この世からあの世へと葬り去られた幽霊などを生き生きと描くことで、「<sup>こぼ</sup>毀れ落ちていくものたち」への鎮魂が描かれている。井上ひさしの作品には、『吉里吉里人』における「地の霊」、「父と暮らせば」の竹造など、数多くの幽霊が登場するが、この作品では、幽霊によって生かされる「わたしたち」、幽霊と人間が共存する「わたしたち」の世界が、明るく力強く描かれているのである。

第七章では、魯迅とその周辺に集った日本人と中国人の群像劇「シャンハイムーン」を論じた。この作品では病に伏す魯迅の「からだ」、二つの〈国家〉に引き裂かれる「からだ」

など、「からだ」をめぐる多様な議論が展開されている。舞台上では大きな舞台背景の転換もなく、ただ六人の俳優の「からだ」を通して物語が進行する。「シャンハイムーン」の〈言葉〉は翻訳というかたちで越境する。演奏のメロディやリズムと重なり合うことで重層化される。こうして、登場人物たちの「からだ」は国境や領土を離れ、ひとつの「ムーン」に照らされる人間となる。井上ひさしは、魯迅の作品や人生を通して越境の可能性を表現したのである。

第八章ではヨーロッパを舞台にした「ロマンス」を取りあげた。本作の特徴のひとつは、生涯をボードビルに捧げたチェーホフを主人公に据える一方で、音楽の旋律だけを転用し、歌詞は新たにつけるというスタイルで音楽劇を構成していることである。また、劇作家であるチェーホフの物語を描きつつ、彼の芝居における〈笑い〉の本質を探るような入子型の構成となっている。チェーホフの生涯の悲劇的な側面に焦点をあてつつ、それを喜劇に転換する手法が取られている。井上ひさしはその晩年において、ついに〈笑い〉そのものの本質に迫ろうとしたのである。

井上ひさしの文学における〈笑い〉は、単に観客や読者を笑わせることにとどまらない。〈言葉〉の性質や機能を探究すると同時に、人々を抑圧する権力や暴力に抵抗するための〈言葉〉を鍛えようとした。登場人物たちの「声」や「からだ」を最大限に活かすための演出を心がけるとともに、観客を劇的空間へとひき込むための趣向を凝らしたのである。

## Ⅱ. 論文審査の結果の要旨

### (1) 論文の特徴

本論の特徴としてまず指摘しておきたいのは、これまでの井上ひさし研究において、ほとんど言及されることがなかった初期のコント集について、「てんぷくトリオ」の座付作者であった経歴を踏まえて分析したことである。また、井上ひさしのコントにおける〈笑い〉がどのような趣向によってもたらされるのかを論理的に解き明かした点も評価されてしかるべきである。

小説に関しては、井上ひさしの代表作である『吉里吉里人』を論じ、方言と共通語の偏差などを活用した言葉遊びの構造を詳細に解き明かした。また、この作品は「吉里吉里国」という架空の独立〈国家〉を通して、そもそも〈国家〉とは何か？ 〈国家〉権力はいかにして国民をコントロールし、抑圧するのか？ を問うたものであることを指摘した。申請者はこの作品の語り手、歴史的化身として繰り返し登場する「地の霊」に着目し、革命の挫折は決して無意味ではなく、敗北のなかから新しい力が沸き起こってくる可能性を論じているが、それは、これまでの『吉里吉里人』研究に新たな知見を加える議論であり、今後の研究史に影響を与えることになるだろう。

『吉里吉里人』において露わになった〈言葉〉をめぐる闘争は、次の「國語元年」にも引き継がれている。明治初期の日本において「共通語」なるものが作られる過程を喜劇として描いたこの作品には、すべての〈言葉〉を統一して国民を「ひとつ」に束ねることの困難と、それを強行に推し進めていく〈国家〉の暴力性が描かれている。「共通語」が幻想であることが地方人たちの闊達な振る舞いによって逆照射されている。本論はそうした「共通語」の逆説性を鋭く暴き出した点において優れた成果である。

第二部に関しては、評伝劇を「シリーズ」として読み解き、個々の作品の特徴とそれぞれに通底する方法意識を同時に探究している。井上ひさしは、歴史上の有名人の作品、伝記、研究書などを丹念に読み込むとともに、彼らが生きた時代の自家製年譜まで作成して虚実を融合させた評伝劇を完成させたが、対象となった有名人の多くは偉大な人物として歴史に名を残す一方、実人生においては必ずしも恵まれた生涯を送ったわけではない。逆にいえば、井上ひさしの関心は彼らの不幸や不遇さに向けられており、その作品世界と実人生のギャップにこそ劇的要素が求められているのである。

井上ひさしは生涯を通して〈笑い〉を考えてきた作家である。だが、初期のコントにおいてはパターン化された〈笑い〉で観客を魅了することもあったが、その後の小説や戯曲においては、〈言葉〉と〈人〉が織りなす人生模様の網の目に〈笑い〉の要素を探し出し、悲劇と喜劇が絶えず反転し続けるような趣向を得意としたのである。

## (2) 論文の評価

各章において、高い学問的価値を有する話題が精緻に論述されており、井上ひさしの小説と戯曲を新たに読み直すだけでなく、すべての作品を〈言葉〉と〈人〉という観点から分析することで、その方法や趣向が解き明かされている。先行研究を適切に踏まえつつそれを乗り越えていこうとする研究姿勢、草稿や資料を丁寧に読み解きながら自説に説得力をもたせることにも成功しており、高い学術性を備えている。

また、井上ひさしの〈笑い〉は、単に読者や観客を笑わせることを目的としているのではなく、権力や暴力への抵抗としても機能している。読者や観客が抱く期待の枠を壊し、不遇と思われがちな人間の生のなかに〈笑い〉の要素を探し求めようとする。本論は、そうした井上ひさしの文学の反骨性を鮮やかに論証し、世界文学へと開かれていく可能性を指摘した点において、今後の研究動向に大きな影響を与えるであろう。

「ひょっこりひょうたん島」をはじめとするテレビドラマ関連の仕事に関する論考がないこと、井上ひさしが座付作者として奮闘した劇団「こまつ座」に関する言及がほとんどなされていないこと、芝居における舞台演出や俳優の身体といった要素が十分に検討されていないことなど、いくつかの課題は指摘されたが、本論はそうした瑕疵を補って余りある数多くの成果をあげており、優れた研究として評価できる。